

絵画修復家のアトリエから

加賀優記子 絵画修復家

今日は2月の最終日。庭の梅の木も紅白に咲いています。もうすぐ、桜の季節なのね……とは、想像し難い冷たい雨の降る一日です。

ああ、とにかく今年の春は、私にも花粉じゃあなくてシアワセが降り注いでくれないかなあ、なんて呟きながら鼻をぐすつと言わせています。

……だって、私の人生にはかつてスムーズに上手くことが運ぶ、なんてことは一度も無かつたんですもの。必ず、波乱含み。それが良くわかっているの、この間のルビーホールでの講演会も1時間早く来て準備してた。

そう、何時だってスライドプロジェクトは私の恐怖の元。どんなに注意していても、やっぱり本番でぶっ壊れるし、

成果をきちんと話せたぞ、とせつかく思ったのに、後ろで映していたプロジェクトのグラフが、機械の不調でゼーンぶピンボケだったんだって！

こういう私の人生ですから、本当、何処に居たってネタはつきませぬのよ。そういう事で、まだある私のループルの不幸話。

あの頃、ループルはとにかくオルセー美術館が出来上がったので、色々忙しかった。アングルの泉も、クールベの大作も、みんなループルを出てオルセーにお引越した。

と、言うことは、ループルのどの部屋も、たいてい何かしら展示物の入れ替えが行われたのです。私の仕事場だったルイ王朝の居室の展示室も、天井画の修復が終わると、今度は壁の塗り替えがはじまった。で、室内にある調度品はすべて運び出される事になった。

部屋の色を塗り替えるのはとても大変なことです。そのサロンの持つ歴史的意義や、天井画の色彩、続きのサロンとの関係なども考慮され、何人もの責任者が

集まって長いこと議論される。オキシデントル・アートの最高責任者を筆頭に、他にも何人もの専門家が意見を戦わせる。王朝時代の家具等が専門の学芸員、金時計に強い学者、ループル宮そのものの歴史を扱う学者。絵画作品の修復に関して

はもちろん現場に取り組むものとして、私たちにも発言権はありますが、壁の色には全く関与は出来ません。

仕事を終えて天井を見上げて綺麗にみえたなあ、とうとうと天井画を見上げても、翌日来て見て「ひえー、びつくり。」って事も結構あります。(誰が決めたのか、壁が真っ赤だったの。)

本当、壁の色一つで全然部屋の印象は変わるのです。天井画もそれにつられて上品にも、下品にもなったりする。

事件のあったその日は、そういう事で壁が真っ赤になっていたので呆然として私がサロンに突っ立っていた時、(養生でビニールだらけになった床には、まだまばらに家具が残っていて、青い作業着

を着た労働者が行ったり来たり忙しそうにしていた。)もう一人身なりの良い瘦せた金髪の50過ぎの紳士が立っていて、咄嗟にねえ、きみ！と私に声をかけてきた。「ねえ、きみ、この椅子一緒に向こうまで運んじゃおうじゃないか、手伝ってくれ！」

「はい、」と私はさっと紳士が持ち上げた椅子の片側の肘掛を持った。私は彼が誰だか知っていた。ループルの最も高い階には、細い廊下がおごそかに長く長く続く廊下ある。こ

こは、観光客は決して通れない。細い廊下には、両側にしばらく素晴らしいコロコロなどの小さな油彩のエスキースが並んでいて、息を呑んでしまう。

その陳列が終わると、一つ一つの重厚な扉に(西洋絵画)(東洋美術)などのプレートが取り付けられた小部屋が向こうまで続く。一人一人の学芸員の部屋だ。時折、朝などはこのドアが少しだけ開いていて、暗い部屋の、窓の逆光の中でテキストを読みながら静かにカフェを飲む姿を見たりする。この紳士の事も、毎朝通るこの廊下のドアの向こうに何回か見かけた。

持ち上げた椅子はかなり重かった。肘掛は木彫で石膏が塗ってあり、純金の箔が貼られていた。クッションのところはゴブラン織りで、脚は優美な曲線に彫ら

れていた。廊下に二人で重いので、なかばへつぴり腰になって運び、じゃ、ここに、つて顔を見合わせて椅子を置いた途端、彼が「ううう。」と言った。「ん？腰でも痛めたのかな？」と私が思ったと途端、私も起きた事態を悟った。

手が……。手に、とんでもない感触が！握っていた肘掛椅子の、金箔の貼られた石膏が、崩れてびつり手に貼りついて来ていたのだ。彼の手を見ると、私よりもひどい。本当に両手にぐっしやり、と言う感じですが剥がれて手にくっついて来ている。これは……このまま椅子から手が離せない!!

私達はどうする事も出来なかった。何度か彼が「おーい、助けてくれ！」と叫んだが、どうやら労働者達は昼食に行きたらしい。こうした工事のために閉鎖された廊下なので監視員の中にはいない。頼みの綱は先回お話しした私の相方のズビシエックだ。今日は午後からスタートの仕事だから、そろそろ来るはずだ。(でも、彼は遅刻魔だ。)

と、いう事でかれこれ私達は1時間くらいその状態で人を待っていたのだ。しかも、その後は大騒ぎ！だって、この悲惨な状態を解決できるのは家具の修復家しかありえない。

まずは彼等と呼ばう、と決断できる立場に居る「オキシデントル・アート」の責任者は、椅子を挿んでいる彼だった。急遽家具の修復家が道具を持ってやって来るのに1時間また待った。で、そうつと私達の手から石膏の破片を採取し、椅子に戻してゆくの2時間。

「椅子から開放」されたのは夕方になってた。もう、ずっと不自然な中腰で足は震えるし、ズビシエックは端で私を笑わすし、鼻が痒くてもかけないし、さんざんだった。でも、私は誰にも叱られなかった。だって、怒る立場の人が張本人だったから。

彼はきつともものすごくやばい事になったのかなあ。館長に叱られたりしたかなア。あの場合、白い手袋をはめて家具の修復家の許可を得て家具の移動をするべきだったのだ。

しかし本当に、あの頃はループル全体があたふたしていた。全くもって、エントランスのピラミッドが出来たり、ループル大改造で、実に慌しかったのだ。

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ループル美術館の絵画修復員を経て、現在は鶴沼で修復工房を主宰。

さあ、今回は、そんな慌しいループルに起きた(私にはではない)数々の不幸話でも書こうかな。ドジで不幸なのは、私だけではない、と言う事の証明のためには?!